

明治前期の経済団体の活動 黎明期福井商法会議所の事績

福井商法会議所の初代会頭は、第九十二国立銀行副支配人伊藤真である。彼は、商法会議所の設立とともに、殖産興業や情報革命、物流、貧民対策など、郷土建設のために様々な分野で多くの足跡を残した。ここで伊藤を中心に取り組んだ黎明期の福井商法会議所の事績について紹介する。

◆殖産興業

・伝習生の派遣

伊藤は、敦賀県時代勸業課長として福井県の地場産業の振興にあたるが、機業家酒井功より、京都勸業場でフランスより購入されたバタタン機・ジャカードが広く起業家に公開されており、県として京都への伝習生を派遣してほしい旨の請願がだされると、それを実現させた。

この時、2名の県費派遣が実現しているがその時伝習生として選ばれた中に「福井の織姫」として知られる細井ジュンがいる。

また、伊藤は織物の染色技術の重要性も指摘、別に村野文次郎（のち福井商業会議所副会頭）を京都染色伝習所（舎密局）に派遣する。

村野はこの後、福井に羽二重技術を導入した最大の功労者となる技術者高力直寛を福井に招聘するという大きな仕事をする。

京都への伝習生派遣がその後の福井の繊維産業の発展に果たした貢献は計り知れない。伊藤はまた、バタタン機の県費購入も実現させている。

・第九十二国立銀行の設立

石川県時代に伊藤は官吏を辞す。伊藤は、福井県が石川と滋賀に分属された事態について危機感を覚え、民間人の立場から産業振興を進めるべく、旧福井藩の上級藩士を統合して払込資本12万円で「第九十二国立銀行」を創立。

事実上の頭取には家老の粕氏が就くが、副支配人として実質的経営にあたることになる。

九十二銀行は、織物金融など本県産業振興のうえで大きな役割を果たした。

初代会頭 伊藤 真（いとう まこと）
在任期間 明治13年～明治20年
福井藩権少属、石川県第二課、第九十二国立銀行副支配人、福井県議会議員、福井商法会議所初代会頭

弘化元年（1844年）、越前国福井城下毛矢の下級藩士の出身。幕末から鹿藩置県と統廃合を繰り返す行政のなかで、官吏として福井の殖産興業に努めていた。特に、敦賀県時代には、勸業掛として酒井功から織機の伝習生派遣の建議を受けて細井ジュンの京都派遣に尽力した。また染色技術の重要性を指摘し村野文次郎を同じく京都に派遣、福井における羽二重織物産業興隆の礎を作った。石川県時代に官を辞し、第九十二国立銀行を設立、民間人の立場で産業育成に力を尽くす。商法会議所設立には、旧藩士団の大きな支援があった。福井県誕生後には、第一回県議会議員選挙にも当選、また、言論活動のため新聞も創刊。明治福井の基礎確立にあたった。



京都勸業場



京都舎密局



第九十二国立銀行券

◆基盤整備の推進

・春日野隧道の開削

伊藤会頭時代の福井商法会議所の手がけた仕事の中でも、嶺南と嶺北を結ぶ新たな物流ルートを整備する春日野道の整備推進は、福井県の一体化を進める上で、重要な基盤整備プロジェクトといえる。

伊藤は、福井の商工業の発展に、物資輸送のために物流網の確保が不可欠との認識から、新たな車道建設の必要性を訴えた。明治17年に開通した長浜～敦賀間の鉄道により商品流通や人的交流の面で嶺南地域の利便性は一気に向上したが、伊藤は、物流基盤の整備こそが、福井県を嶺北・嶺南一体的に発展させる鍵であると認識し、明治17年に来福した農商務省幹部に直接訴える。



かつての春日野隧道

そして翌年8月、臨時商法会議所大会を開催、県内の商法会議所や関係者に賛同と協力を取り付け、募金活動を実施。3万5千円の寄付金を募るとともに、県会に強力に働きかけ、ついに着工にこぎつけた。そして明治20年、ついに嶺北と嶺南がはじめて車道で接続された。これが春日野道で、本県物流の大動脈となり、今に続く国道8号の前身となる。

・最初の景気刺激型大型公共工事

また伊藤はこの工事を、松方デフレに直面し大不況にあえいでいた、福井経済の立て直しのため役立てることを決意、貧民の不況対策、雇用対策と結合させ、現在でいうところの景気刺激型公共工事として、福井県発展の礎を築いた。



春日野隧道現況

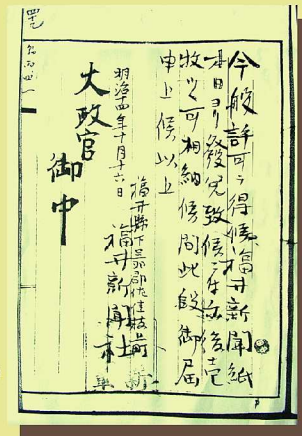
◆情報革命の推進—新聞の創刊

福井県設置後の明治14年10月16日、本県で初の日刊新聞「福井新聞」（第一次福井新聞）が発刊された。伊藤は、かねがね福井県の「情報後進県」（当時福井は人口1万人あたり新聞購読者11名で全国最低水準）を憂いており、産業振興と民意の向上を目指し、旧福井県士族の協力を得、自らは社主として、推定約1,000部の新聞を発行した。

伊藤の発刊した「第一次福井新聞」は、民衆の知識欲を高め、この後学習結社、政治結社の興隆を見せるなど福井における最初の情報革命を担った。

伊藤は、創設まもない福井県議会に旧士族の代表として当選し、議会などでも活躍しているが、明治22年前後同じ旧福井藩士族で、石川県庁の石田磊の帰福と第九十二銀行の支配人就任（後に頭取）を実現させ、これらすべての事業から引退する。

伊藤の意思は石田が受け継ぎ、銀行を通じ産業振興に努めるとともに、福井商業会議所の会頭となって、明治後期の福井経済を牽引することになる。



福井新聞発刊局



福井新聞社跡地（現在）